

12 月第 5 週の礼拝説教

- 日 時：2024 年 12 月 22 日（日）10：30～11：30 降誕節第一主日礼拝
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：マタイによる福音書 2 章 1～12 節（新約 P2）
- 説教題：「星が先だって進み」
- 讃美歌：268（朝日は昇りて）
256（まぶねのかたえに）

2024 年の最後の主の日になりました。今年の 12 月は例年と比べて気温の高い日が多かったようですが、雨もあまり降らなかったせいか空気が乾燥しており、年末になって、インフルエンザやコロナウイルスに感染する人が増えているということです。我が家の次女の家族も、ネット上の家族アルバムにクリスマスの様子がアップされていないので、もしかしたらと思っていましたら、昨日の夕方（12/28）にやっと消息が分かりました。やはり、家族 4 人ともインフルエンザに感染して大変だったようです。新年に向かって、どうぞ皆さま、ご健康にご留意ください。

そのような状況ですが、私たちはマタイによる福音書 2 章 1 節から 12 節をご一緒に読んでまいりましょう。マタイによる福音書においては、イエス・キリストの誕生は旧約聖書のミカ書やイザヤ書の預言を成就したものであると考えられていたようです。この 2 章の物語は、ミカ書 5 章 1 節の「エフラタのベツレヘムよ／お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために／イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。」という預言を背景にして描かれていると言われています。2 章 1 節は、東の方で星を見て「ユダヤ人の王」として生まれた方がいることを知った占星術の学者たちが、その王を礼拝するためにわざわざエルサレムへやって来たところから始まります。ヘロデが王であったこの時代、「ユダヤ人の王」はメシア（救い主）と同義で用いられていました。そのメシアが誕生したとあっては、ヘロデが恐れるのも無理はありません。力で押さえつけてきたユダヤ人たちがその中で生まれた子供を「ユダヤ人の王」として立てて、自分に反旗を翻してくることになるかもしれなかったからです。ヘロデは直ちに行動に移し、反乱の芽をつぶそうと図ります。その流れの中で起こった恐ろしい出来事が本日は読みませんが、16 節から 18 節で記されているベツレヘムにおける幼児虐殺でした。この出来事は、救い主の誕生という喜ばしい出来事に水を差す恐ろしいものだったと思われます。けれども、そこからかろうじて虐殺を免れてエジプトに落ち延びる主イエスの姿に、後の十字架における苦難が暗示されていると言われています。4 つの福音書すべてに、主イエスが十字架刑に処せられるときに、「ユダヤ人の王」という罪状書きが掲げられていたことが描かれています。その中でもヨハネによる福音書は、19 章 19 節から 21 節で、主イエスの処刑の責任者である時

のローマ総督ピラトの様子を丁寧に描いています。「19 ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、『ナザレのイエス、ユダヤ人の王』と書いてあった。20 イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。21 ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください」と言った。22 しかし、ピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と答えた。」これらの記事から、主イエス・キリストの誕生からその十字架上での死までが一直線状に繋がり、福音書においては、救い主（メシア）についての深い意味が語られていることが分かります。

ところで、占星術の学者たちの来訪と礼拝は、旧約聖書イザヤ書 60 章 1 節から 6 節の「1・・・あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。・・・3 国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む。・・・6・・・シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る。こうして、主の栄誉が宣べ伝えられる」の成就とも考えられています。主イエスこそ旧約聖書の預言者が預言してきた待望のメシアであるということを示し、それと共に、その方がユダヤだけではなく全世界の人々が待望してきた救い主でもあられ、その方の前に世界中の人々が膝まずいて礼拝をささげることが明らかにされると考えられています。最初に主イエスに出会い礼拝をささげたのが、東の方からやってきた外国人（異邦人）であったということに、後のキリスト教の世界に向けての伝播を先取りしているということもできるでしょう。彼らを導いてきたのは「東方で見た星が先立って進み」と記されている星です。その星は「幼子のいる場所の上に止ま」りました。ここで占星術の学者が主イエスに献げるのが、「黄金、乳香、没薬」です。このことは、聖誕劇（ページェント）で3人の博士が登場してくる理由の一つになっています。「黄金」は、主イエスが王であることを表していると言われています。「乳香」は、神殿で燃やして煙として用いられるもので、神の前へと立ち上っていくわたしたちの祈りを表すものとされ、主イエスが神でもあられることを表します。そして「没薬」は、やがて主イエスが十字架で死なれる備えとして献げられたということを表しているようです。そして、実はこの「黄金、乳香、没薬」によって、彼らは自分の国においては星占いをしていたのです。そのことを考えると、彼らは自分の持てる最上のものを主イエスに献げたということもできますが、一方では、そのことによって彼らはもはや占星術が続けられなくなるということにもなるわけです。言い換えれば、彼らは彼らの生きて来た人生とこれから続くはずであった人生を主イエスに献げたということもできます。それはまた、これまでの古い生き方には戻らない（戻れない）ということをも意味していました。12 節で「ところが、『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。」という表現には、そのような深い意味が込められているということもできます。今年のク

クリスマスで主イエスに礼拝をささげたとき、私は一体何をお献げしたでしょうか、そして私は果たして今、古い生き方から別の道を通して新しい生き方へと歩み出しているだろうか、と問われるところです。しかし、「自分たちの国へ帰っていった」と記されているところに、何もかも捨てて新天地で新しくスタートを切りなさいという厳しい勧めではなく、もう一度、自分の置かれてきたところに帰り、新しい生き方をしっかり考えなさいと言う勧めの言葉を聞くことができるのではないのでしょうか。

昨夜、本日の箇所を読みながら、この場面もかつて教会学校などでページェントにしたことを思い出していました。そしてまた、50年以上も前に教えていただいた詩を思い出しました。それは松田明三郎という旧約聖書学者が作った「星を動かす少女」という詩です。

クリスマスのページェントで、
日曜学校の上級生たちは
三人の博士や
牧羊者の群や
マリヤなど
それぞれ人の眼につく役を
ふりあてられたが、
一人の少女は
誰も見ていない舞台の背後にかくれて
星を動かす役があたった。

「お母さん、
私は今夜星を動かすの。
見ていて頂戴ね」

その夜、堂に満ちた会衆は
ベツレヘムの星を動かしたものが
誰であるか気づかなかつたけれど
彼女の母だけは知っていた。
そこに少女のよろこびがあった。

この詩に出会って「私にも星を動かす役を与えてください」と多くの方々が祈ったというエピソードを聞いたことがあります。そして、私にもそのように祈った日々があったことを思い出しました。その思いを新たにして、2025年を皆様とご一緒に迎えたいと願っています。